

# 「底が突き抜けた」時代の歩き方 563

## アンナ・ポリトコフスカヤ暗殺へのいくつかの発言～追悼

### ■国境なき記者団によるノーヴァヤ・ガゼータ副編集長へのインタビュー

ノーヴァヤ・ガゼータ副編集長ヴィタリ・ヤロシェフスキー、アンナ・ポリトコフスカヤについて語る：

「最後の希望としてのアンナ・ポリトコフスカヤ」 ロシア 2006 年 10 月 31 日

[http://www.rsf.org/article.php3?id\\_article=19517](http://www.rsf.org/article.php3?id_article=19517)

—調査に進展はありますか？

「調査中なので何とも言えません」

—警察には協力していらっしゃるのですか？

「ええ、記者たちも警察に協力しています。皮肉なことに過去にもこうした経験がありましたからね。彼女を失う前に、私たちは、イゴール・ドムニコフとユーリ・シェコチヒンの2人を失っていますから。イゴール・ドムニコフを殺した犯人が見つかったのは、私たちが捜査に協力したからです」

—アンナ・ポリトコフスカヤはこれまでも命を狙われていましたよね。彼女は脅迫されていたのでしょうか？

「何度も狙われてきましたし、幾度も脅迫を受けてきました。最初に命を狙われたのは、チェチェンで作戦を行っていた[東シベリアの都市]ハンティ・マンシスクの[特殊部隊]オモンについて、一連の記事を書いた後でした。オモンの軍人たちがチェチェン人男性を誘拐して拷問したことについて書いたのです。その記事はノーヴァヤ・ガゼータに掲載されました。その後、関係者の一人であるラピンと呼ばれる将校—チェチェンでの彼のあだ名は『人身売買斡旋業者』というものでした—が、彼女を殺すと脅すようになったのです。彼女はなんとか無事でいてくれました。私たちは、彼女に海外に身を隠すよう勧め、彼女もしばらくの間ウィーンにいたのです。この『人身売買斡旋業者』は、11年の禁固刑を受けました。ですが、どうせその後で恩赦を受けて解放されたのではないかと思います」

「2004 年にもアンナは再び殺されかけました。ベスラン学校占拠事件のときですね。彼女は、事件が起こっている間に、急いで飛行機で現場に飛び立ったのです。自分なら破局を食い止められるのではないかと考えて。ですが、モスクワからロストフ[直行便がないためロストフを経由しなければならなかった]での機中で、何者かが彼女に毒を盛ったのです。医師たちが必死で彼女を生還させてくれました」

—彼女の殺害は特定の記事によるものだと思いますか？

「彼女のジャーナリストとしての業績、そして彼女が公的に行ってきた活動のためだと思います。彼女が殺された後、私たちは彼女の記事を再掲載したのですが、[彼女が初めてノーヴァヤ・ガゼータに記事を掲載した]1999 年から数えて彼女が 511 もの記事を書いてきたことをあらためて確認しました。その大半は、重大な問題に関するものでした。それによって、権力を持つ危険な人物の利権に抵触してしまったのです。彼女は一般化という方法で犯罪を婉曲に扱うことをせず、具体的な人物の名前や、場所、特徴といったものまで報道してきましたから」

—彼女の公的な活動とはどういったものだったのですか？

「彼女はロシア人権活動家連盟や海外に認められた人権活動家でした。彼女は自分の時間の多くをこの活動に割いてきたのです。ときには平日を基本的にそのために使うことさえありました。軍隊にいる息子を戦争で亡くした母親たちが、この事務所にやってきます。家族を失った父親たち、まったく無力な難民たちも、この事務所にやってきます。彼らは、まるでアンナが救済者であるかのように、彼女に会いにきていたのです。そして、彼女も彼らを助けていました。彼女が公的にしていた活動とは、そういったものです」

—あなたのノーヴァヤ・ガゼータはロシア政府に対してきわめて批判的です。ロシアの言論状況についてはどうお考えですか？

「もちろん非常に厳しいですね。アンナ・ポリトコフスカヤのようなジャーナリストが殺害されることは、表現の自由に対する恐ろしい侵害です。表現の自由ということに関するなら」

—ロシアには言論の自由は存在しないということですか？

「ほとんど存在しないでしょうね。ただし、ノーヴァヤ・ガゼータは存在しますし、私がこうしてあなたのご質問に答えることもできる。ですから、決して存在しないわけではない。ですが、たとえばジャーナリストたちが表現の自由を謳歌していた 10 年前のロシアと比べると、状況は様変わりしています。ロシアのテレビ局を見てください。テレビ局はクレムリンの直接支配下にあります。うっとうしいことですが、そういうわけなのです。政府はテレビ局を注意深く見ています。というのは、テレビがロシア世論に与える影響が、いまだに巨大だからです」

—政府が批判されないテレビ局の独占状態がある一方で、出版メディアのジャーナリストは殺されているわけですね。政府は彼らを恐れているのでしょうか？

「政府が我々を恐れているようには思えませんね。客観的に言って、私たちの声というのはたいして大きくありません。ノーヴァヤ・ガゼータの記者がテレビで扱われることなど、実質的にありえません。テレビ局は命令されているんですよ。この種のジャーナリストを扱うな、彼らの声を伝えるな、出演などんでもない、とね。よほど特別な出

来事がない限り、ある日、テレビにノーヴァヤ・ガゼータの記者が 2 人も出演するなどということはありせん。政府が我々を恐れているかどうかはわかりませんが、私たちを監視していることは間違いありません。政府は私たちの記事を読んでいますし、私たちを見張っています。ロシアよりも市民の自由が保障されている国では、アンナが書いていたような記事が、政府の最上部での変化をもたらすことさえできるのでしょうか。ここではそんなことはありえせん。ノースイースト、クルスク、ベスラン・・・すべてはキャラバンに向かって吠え立てる犬の声のようなものです。ロシアでは、いつもそうなのです」

―殺害事件について、政府と市民社会の反応はいかがでしたか？

「ロシアにはつねに二つの社会があります。ひとつはアンナの葬儀に参列した人々の社会。私たちのところには、ロシア全土から哀悼のメッセージが届けられました。ジャーナリストの支援者からメッセージが寄せられたことは言うまでもありません。同僚や私のところには、ここ 2 週間いつも電話がかかってくる。コメントなどを求められるのですが、葬儀には、ロシアのテレビ局がすべて取材にやってきました。しかし、同時に、ジャーナリストたちは政府からの庇護を受けられることもありませんし、国民の大半は無関心なのです」

―彼らの無関心さに驚かれましたか？

「ロシアには市民社会などありません。ご存知でしょう？ ロシアには同情心や団結心はないのです。チェチェン戦争は 1994 年から続いています、本当に大きなデモが起こったことなど一度も思い出せません。ベスラン事件の後で、人々が事件について語っている、そんな状況を思い出すこともできません。赤の広場で私たちが集会を主催したときも、ようやく 200 人が集まったという状況でした。私もその場にいました。すると、こんな会話が聞こえてきたのです。『参加しないと給料を下げるって言われたから来たんだよね』『私は参加したら休暇が 3 日延長されるって言われたね』。300 名もの人々―しかもその半数が子どもたち―が殺されたことなど、もう誰も覚えていないかのようでした。ローマでは、こうした抗議集会に何十万人もの人々が集まったというのに。彼らは子どもたちと一緒にキャンドルを掲げて集まったのです・・・。ローマがどこにあり、ベスランがどこにあるかは、ご存知でしょう？ イタリアとロシアは、いったいどこにあるのですか？ ロシアではこの手の無反応さがあまりにも顕著なのです」

―アンナ・ポリトコフスカヤ殺害事件は解決すると思いますか？

「私たちには過去にも刑事事件の調査に関わった経験があります。イゴール・ドムニコフの殺害犯は特定されました。この事件も政治的殺害でした。彼は閣僚の腐敗について書いていたのです。今回の殺害事件が政治的な背景を持つことも疑いありません。私たちは、彼女の殺害犯とそれを命じた人間を見つけ出し、裁判にかけるためになら、できることは何でもします。ノーヴァヤ・ガゼータの株主は、アンナ・ポリトコフスカヤの

殺害の煽動や計画につながる情報を求めて 2400 万ルーブルの賞金を掛けました。これによって手がかりが見つかるのではないかと考えています。希望を失うつもりはありません。アンナは調査報道を続けてきましたが、そのいくつかは本当に恐ろしく、そして最後まで正しいものでした。私たちはこの調査を最後まで続けていきます」

### ■アンナ・ポリトコフスカヤへの鎮魂歌

フィンランドのアーティストたちが、アンナへの鎮魂歌を発表しました。YouTube で公開されていますので、よろしければお聴きください。

<http://www.youtube.com/watch?v=Q8xelS8G-SY>

フィンランドの街角で彼女の死を悼む人々が掲げるキャンドルの数にも圧倒されます。葬儀当日の情景を収めた「コーカサスの薔薇 アンナ・ポリトコフスカヤ」という映像もあります。<http://www.youtube.com/watch?v=SFtxWdkJlwo>

「アンナ・ポリトコフスカヤに捧げる歌—新しい時代の始まりに—」

<http://www.youtube.com/watch?v=Q8xelS8G-SY>

(訳注：死者の統計については、かなり控え目な数であるかもしれません。)

第一次チェチェン戦争は 1994 年から 1996 年まで続いた。

第二次チェチェン戦争は 1999 年に始まった。

戦争は、今も続いている。

10 万人の市民が戦争で殺された。

そのうち 3 万 2000 人は子どもたちだった。

アンナ・ポリトコフスカヤはジャーナリストであり、本の著者であり、戦時特派員だった。

彼女は 40 回以上もチェチェン取材した。

「私にはこの仕事をするための強さがある。だって、他の誰も私の代わりになってくれる人はいないから」

ロシアでは 1993 年から 2006 年までに、46 名のジャーナリストが殺害されている。

グローズヌイでは建造物の 70 %が破壊された。

何万人もの人々が、廃墟の中に暮らしている。

チェチェンで生まれてくる子どもたちの半数以上が、深刻な病気をかかえている。

公式統計によると、1 万 1000 人のロシア軍兵士も死亡している。

2 万 5000 人が負傷している。

「私は戦争に加担したりはしない。それは終わらなければならないものだから」

アンナ・ポリトコフスカヤ 1958-2006

### ■ロシア連邦：新 NGO 法によりロシア・チェチェン友好協会に閉鎖命令

先日お伝えした「ロシア・チェチェン友好協会潰される！」について、アムネスティ

・インターナショナルからのフォローがありました。

アムネスティ・インターナショナルはロシア・チェチェン友好協会(RCFS)を閉鎖させるという判決を遺憾に思う。本日ニージニー・ノブゴロド市で開かれた法廷で、チェチェンの人権侵害を監視してきた RCFS の閉鎖命令が決定された。

「チェチェンで人権を侵害された人びとのために歯に衣着せぬ発言をしてきた団体を排除すべく、入念な作戦が練られた。本日の判決は、一連の作戦の最新の動きだと思われる。」アムネスティの欧州・中央アジアプログラム部長ニコラ・ダックワースはこう語った。

「作戦は RCFS の活動家らに対する嫌がらせから始まった。そして活動を麻痺させるべく、RCFS 自体と職員に対して同時に法的措置を取るまでにエスカレートした。」

判決の根拠となった新法によると、非政府組織(NGO)が「過激派」活動家として有罪判決を受けた者に率いられることは違法である。RCFS 代表スタニスラフ・ドミトリエフスキーは、チェチェン独立派指導者が書いた暴力的でない記事を發表したとして 2006 年 2 月 3 日に「人種憎悪」罪で有罪となった。アムネスティの見解では、ドミトリエフスキーは表現の自由の権利を平和的に行使しただけであって、そもそも裁判にかけられるべきではなかった。

「この誤った有罪判決はスタニスラフ・ドミトリエフスキーを個人的に苦しめただけでなく、評価の高い人権擁護団体を閉鎖させる根拠となった」とニコラ・ダックワースは言う。

「これは新 NGO 法による成果第 1 号なのか？ 人びとの声をさらに弾圧する計画の青写真なのか？」

スタニスラフ・ドミトリエフスキーに対する有罪判決は破棄されるべきであり、ロシア・チェチェン友好協会は重要な活動の継続を許可されるべきである、とアムネスティは考える。

判決により RCFS に 2 ヶ月の閉鎖準備期間が与えられた。その間に上告が可能である。スタニスラフ・ドミトリエフスキーは、ロシア連邦最高裁に上告すると語った。

「こんな判決を受けたからといって人権擁護活動を停止することはない。何らかの方法で続けていく。我々がこれで黙ると当局が考えているなら、それは間違いだ。」

## 背景情報

RCFS はチェチェンをはじめ北コーカサス各地で人権侵害を監視している。ニージニー・ノブゴロド市と北コーカサスのスタッフやボランティアが「失踪」などの深刻な人権侵害に関する日刊プレスリリースを発行し、RCFS の「ロシア・チェチェン情報局」が配布している。2005 年、税務署と司法省登録部が同時に RCFS を訴えた。これと並行してスタニスラフ・ドミトリエフスキーとスタッフのオクサーナ・チェリシエバを「裏切り者」、「テロリスト」支持者と非難するチラシが配られ、2 人に対する脅しとなった。

アムネスティ国際ニュース（2006 年 10 月 13 日）  
（葬儀の映像）（RICHARD GALPIN）

「葬儀の建物の外には人々が長い列を作っています。  
プーチン大統領は、ブッシュ大統領との電話会談で、  
悲劇的な事件だと語り、調査を約束しました。  
ロシアの最高裁判事が直接指揮を執ると言っています。  
イギリスの駐露大使も葬儀に参列しました」

射殺されたロシア人ジャーナリスト、ヘルシンキで追悼集会 - フィンランド

<http://www.afpbb.com/article/963774>

女性記者殺害 プーチン政権へ、内外の批判必至 追悼集会に 2500 人

<http://www.mainichi-msn.co.jp/kokusai/mideast/archive/news/2006/10/09/20061009ddm007030170000c.html>

（独 ZDF）

[http://www.zdf.de/ZDFmediathek/inhalt/13/0,4070,3987053-6-wm\\_dsl,00.html](http://www.zdf.de/ZDFmediathek/inhalt/13/0,4070,3987053-6-wm_dsl,00.html)（葬儀の映像）

[http://www.zdf.de/ZDFmediathek/inhalt/24/0,4070,3986552-6-wm\\_dsl,00.html](http://www.zdf.de/ZDFmediathek/inhalt/24/0,4070,3986552-6-wm_dsl,00.html)（事件の概説）

「告別式には多くの人達が参列しました。

事件から三日、ロシアで唯一とも言える良心を失ったロシアの人々はショックから立ち直っていません。

（Jewgeni Jassin：元経済相 or 無任所相）

『彼女はロシアの良心でした。彼女は殺されましたが良心は殺せません』

（Oleg Panfilov：ロシアジャーナリスト連盟）

『この十年でロシアでは 246 人の優秀なジャーナリストが殺害されています。その中でも彼女はベスト中のベストでした』

ポリトコフスカヤさんは、勇敢な政府批判報道で世界的に有名になりました。特に政府のチェチェン政策を厳しく非難しました。その為にチェチェンと彼女の関係についての捜査も行われていました。

チェチェンの親露派カディロフ首相は、かつてポリトコフスカヤさんを殺害すると脅したことがあるとされていますが、首相は全ての非難を退けています。

ポリトコフスカヤさんは度々殺害予告を受けていました。汚職や軍隊の暴力といった弊害をあからさまに非難していた為です。敵はたくさんいました。

毎日花束が殺害現場には届けられています。人々は哀悼の意と共に怒りを感じています。『数百万人のロシア人がこの国で生きていくことに不安を感じています。これは恥ずべきことです』

ロシアでジャーナリスト殺害事件が解明されることは殆どありません。人々はポリト

コフスカヤさんの事件も迷宮入りするのではと危惧しています」

ドレスデン市民全てがプーチン大統領に友好的という訳ではありません。

メルケル首相との記者会見の席で、プーチン大統領は、『女性ジャーナリストの批判的な記事よりも殺害行為の方がロシアに大きな損害を与えた』と述べました。

メルケル首相は、『女性ジャーナリストが殺害されたことに非常に大きな衝撃を受けた。これが報道の自由の問題の象徴とも結び付くからこそ殺害事件の徹底的な解明が必要である』

(仏 F2)

「アンナ・ポリトコフスカヤさんの葬儀が行われ、大勢の記者仲間や外国人外交官などが参列しました。

ドイツを訪問中のプーチン大統領は、ポリトコフスカヤさんの影響力はロシアでは取るに足らないものであったとしながら、これは許し難い犯罪だと述べました。

モスクワ郊外の墓地には記者仲間や人権活動家、野党の政治家、欧米諸国の外交官、一般の市民など数千人が集まりました。『勇気のある女性でした』『あんな人は滅多にいません』

彼女の死を嘆く支持者達は、彼女の殺害に国民がそれほど憤慨していないことにも嘆き悲しんでいます。『若い人が余り来ていないのが悲しいです。年寄りばかりです。彼女が最後の希望だったかのようです。有名な文化人も来ていません』

大統領府からは文化省の副大臣と大統領の人権担当代表が参列したのみです。確かにポリトコフスカヤさんは生前プーチン大統領を厳しく批判しており、大統領は二日間沈黙を守りました。

今日ドイツでメルケル首相と会談したプーチン大統領ですが、『人殺し』と書かれた横断幕が掲げられました。

大統領は記者会見で犯行を厳しく非難すると同時に、自身への批判について暗に次のように答えました。『この殺人はロシアの現政権や彼女が関心を抱いていたチェチェン共和国の指導者に対し、彼女が書いた記事以上に大きな損害を与えました』

監視カメラの映像により、暗殺犯には四人の共犯者がいたことが分かりました。ポリトコフスカヤさんにとって逃げようのない組織立った犯行だったのです」

(露 RTR)

<http://www.vesti.ru/video.html?vid=57939>

(葬儀の映像)「ドイツのドレスデンでのメルケル首相との会談後の記者会見の中でノーヴァヤ・ガゼータのアンナ・ポリトコフスカヤさんの殺害についての質問に答えたプーチン大統領は、『卑劣極まる行為だ』と述べています。

『誰がこんなことをしたのか、また動機が何であったのかにかかわらず、これは卑劣極まる残忍な行為です。このような犯罪を行った犯人が罪を逃れるようなことがあっては

なりません』

モスクワでは今日、アンナ・ポリトコフスカヤさんの葬儀が行われました。全国各地で人々は蝋燭の灯を燈し、真実を語ることを恐れなかったジャーナリストの死を悼みました。モスクワ市が行った葬儀には、数百人の市民が参列しました。参列者からは、『犯人を一日も早く見つけて欲しい』

『妥協を知らない数少ない職業人を失った』などと哀しみと怒りの声が聞かれました。

ポリトコフスカヤさんは二週間前に亡くなった父親の隣に埋葬されました」

どれが「ほんと」なんだ？---プーチンの発言 <http://nofrills.seesaa.net/article/25265121.html>  
今日のロシアの覚書（朝刊）10.10.2006

元ソ連大統領のゴルバチョフが、週末に起こった有名なロシア人記者の殺人事件への独立調査を行うと誓ったとヒンズー新聞が伝えている。元ソ連指導者はポリトコフスカヤさんが勤務していたノーヴァヤ・ガゼータ紙を一部所有している。

今日のロシアの覚書（夕刊）11.10.2006

（プーチン、遅まきながら記者殺害を非難）

プーチン大統領は火曜日、犯人達が反ロシア感情を世界中に広めたかったのだとの自分は情報を得たと語り、アンナ・ポリトコフスカヤ記者を殺害した犯人達を追い詰めることを誓った。

ビジネスやエネルギー問題にも触れたメルケル首相との共同記者会見は、世界中から非難を集めている契約型殺人についての疑問に占められた。

プーチンは、大統領とロシアのチェチェンでの戦争に対する激しい批判者だったポリトコフスカヤさんの殺人犯達の情報を詳細に語らなかった。

「罪を間逃れさせる事は出来ない、残忍で容認し難い犯罪であったと明らかにしなければならない。我々は信頼出来る情報を得ており、それはロシアの司法当局から隠れ、反ロシア感情を世界中で作り出す為の犠牲者を生け贄にしようという計画を立てていた者達だ。（ポリトコフスカヤさんは）ロシアでの政治生活においては最低限の影響しかなかった。これは彼女の出版物のどれよりも、ロシアとチェチェンに対して遙かに大きな危害を加える殺人だ」。

ロシアの検事達はポリトコフスカヤさんの殺人を彼女の仕事と関連付けている。

プーチンはドレスデンでリムジンから降りると、群衆の中にいた男に殺人事件について野次を飛ばされた。「殺人者」と書かれたバナーを振り、この男は「お前は殺人者だ。ここでは歓迎されていない」と叫んだ。

土曜日に射殺されたポリトコフスカヤさんの葬儀は火曜日にモスクワで行われ、西側の大使を含む数千人の弔問者が出席した。

メルケルは記者達に、プーチンが自分に殺人事件解決の為にあらゆる事を行うと保証したと語った。 <http://app.cocolog-nifty.com/t/trackback/12234934>

## ■誰がアンナ・ポリトコフスカヤを殺したか？

アンドレイ・バビーツキ 2006 年 10 月 10 日 ラジオ・リバティ

<http://www.svobodanews.ru/Article/2006/10/10/20061010000059833.html>

アンナ・ポリトコフスカヤの悲劇的な死についてインターネット上で繰り返されていく議論を読むと、人間の醜悪性はもはや限りなく根深くなっていることが、まざまざと感じられます。

熱狂的な「愛国主義者」などではないごく普通の何千人もの人々が、良心の呵責を感じずに人の不幸を喜ぶ言葉を投げつける様相は、かつてこの国で「人民の敵」が抹消されていくことをソヴィエト市民が純粋に歓喜し、ヴィシンスキーに倣い「犬に対する犬死」の言葉を繰り返していた時代と、いまの時代はさほど隔たりがないことを顕著に示しています。

もしかするとこれは単に、憎悪が国民の義務として評価される国へと状況が舞い戻っただけなのかもしれません。

私がアーニャ（訳注：アンナ・ポリトコフスカヤの愛称）に会ったのは二週間ほど前の海外フォーラムで、深刻なテーマで話し合ったほか、ただおしゃべりをしたりおかしな冗談で笑い合ったりしていました。彼女が非業の死を迎えるかもしれないという予測は、他の人から見ても非常に馬鹿げている考えのように思われたでしょう。あり余るほどのリスクや危険が彼女の命を脅かしていたにもかかわらず、そして彼女に対して当時の同国人（彼らこそが今日、彼女に手をかけた殺人者を賞賛しているのです）がどのような態度をとっていたのか、彼女自身よくわかっていてかすかに冷笑していたにもかかわらず…。

彼女は、その活動やチェチェン政権も含めた様々な権力との関係など、多岐にわたる問題を山のように抱えていました。しかし彼女が（たとえその有益性には限りがあったとしても）話さなければならないと考えていたことを遂行していく意志に、これらの問題が影響することはありませんでした。

彼女と同類の人々、すなわちそれぞれが真実を抱きそれを発言する権利を有している人々は、確固たる姿勢を保ち続けているという印象が強くありました。憎悪や罵言、呪詛の嵐は、このような人々に災いをもたらすことなく、またそれぞれの信条を何ら揺るがすことなく、そのそばを通り過ぎていきます。憎しみをもった人々の行為から生じ得る多くの危険は、しかし彼ら自身が恐れているが故に、真実を貫く人々を避けていくのです。

一方で今日のロシアでは、異なる考えを持った人に対する見せしめ的な制裁は実施されていません。時々何故だか分からないのですが、権力はこのような対策を講じることが控えています。

従って、公開処刑という形をとるような強制的な死に、アーニャの命は相応しくない

と思われていたのです。

しかしインターネットフォーラムの中で、良心と分別を喚起する一部の声が時折遮ることはあっても、大半の一般市民から上げられる歓喜の歓声を耳にした今、私は自分が間違っていたことに気づきました。そこではこの二日間で夥しい血の河が流れました。それもアーニャの血だけではありません。そこでは具体的な人々に対して新たな判決が行われ、余興を続けたいという執拗な願いの声が響いているのです。

自分の真実を持ち続けていただけた人間、そのような女性に下された臆病な殺人について民衆が狂喜する国では、死に該当する根拠は数多く存在していたのです。

誰が殺したのか？ 答えはきわめて簡単です。あなた方も殺したのです。他人の死を願うあなたたちの意思や希望を、そのうちの誰か一人が体現したのです。この「誰か一人」が、みなさんの抱く憎しみの道具となったのです。この次もあなたたちは他の標的を見つけ、その周りでみなさんの感情が凝縮されていくことでしょう。名前を持たない「誰か一人」（どこから、誰によって送られてくるのか重要ではありません）は、みなさんによって養成され、任命地点に移されることで、殺人の武器という役割を演じる者として再来するのです。そしてあなたたちはみな、自分を幸せだとまた感じるができるのです。

けれども、みなさんが抱く憎しみは自分のものだという望みで自分を慰めないで下さい。これは、憎悪を育て上げて様々な方向へ送り出すことができる人々の所有物なのです。彼ら、すなわち強大な力と権力を有する人々にとって、あなた方というのは、愛することは強制されてもできないのに、憎むことはいとも簡単に覚えさせられるように浅はかで、虚偽や暴力には従順に従う群れなのです。（翻訳 K.I.）

#### 10.Oct 2006 ポリトコフスカヤはカディオフ裁判の証人だった

アンナ・ポリトコフスカヤは、チェチェン親ロシア政権のボス、カディオフと彼の私兵集団「カディオフツィ」に対して行われていた裁判の証人でもありました。9日のノーヴァヤ・ガゼータの記事には、カディオフ一派によって拷問・誘拐された被害者や遺族の証言集が掲載されるはずでしたが、彼女の死後、残されたものは、被害者の写真だけでした。

ラマザン・カディオフは、ポリトコフスカヤが暗殺された直後、「悲しみに震える」などと白々しいコメントをしています。

#### 09.Oct 2006 何がポリトコフスカヤを殺したか？

陰謀の結果、彼女は命を落とした。そういう言い方は嫌なのだが、資金と政治権力を背景に地下で作られた暗殺が、私くらいの人間に見通せたらそれは陰謀とはいえないけれど、陰謀は彼女の遺体がエレベーターを血の海にしているのが発見された時に、確かに地上に現れた。もう変えることのできない事実として。

## 09.Oct 2006 人権ジャーナリストであるアンナ・ポリトコフスカヤ氏の殺害を非難する

アムネスティ・インターナショナルは、ロシアの人権活動家でありジャーナリストのアンナ・ポリトコフスカヤ氏が殺害されたことに衝撃を受け、悲しみ、そして強い怒りを表明する。「アムネスティは、アンナ・ポリトコフスカヤ氏の殺害に愕然としている」と、ヨーロッパ・中央アジアプログラム部長のニコラ・ダックワースは語った。「ロシアは、勇敢で献身的な人権活動家をひとり失った。ポリトコフスカヤ氏は正義に対する暴力に恐れることなく声を上げ、正義を求めて休むことなく活動していた」

## 09.Oct 2006 ポリトコフスカヤの死を悼んで

ポリトコフスカヤの死を悼む人々が、彼女の自宅近くに花を捧げに来ているそうです。モスクワ市検察は、彼女の死を計画的な殺人事件として捜査を開始しました。ただし、ロシアでは過去 15 年間に 246 名のジャーナリストが殺害されていますが、政府がまともに調査を行って犯人を特定できた例は一件もありません。

欧州委員会事務局長のテリー・デイビスは、「誠実であったがゆえに多くの敵を作ってしまった」ポリトコフスカヤに哀悼を捧げました。多くの人権団体が、彼女の死を取り返しのつかない喪失であるとして、ロシア政府に対して真相究明を要求しています。

「誰が彼女を殺したか？今日がプーチンの誕生日であることを考えると、これは複雑な政治的挑発だと思います・・・確かなことは、彼女の殺害を計画したのが誰であれ、その人物が人間の人生というものを何とも思っていないということです」（レヴ・ポノマルヨフ 人権団体代表）

ポリトコフスカヤは 48 歳、2 児の母親でした。彼女は 9 日にもノーヴァヤ・ガゼータに記事を寄稿するはずでしたが、彼女が新しい記事を書き、それを私たちが読むことのできる機会は永久に失われました。

「彼女は決して信念を曲げない、誠実なジャーナリストでした。今のロシアでは生きていけないほど・・・」（アレクサンドル：ポリトコフスカヤの夫）[10/9 ラジオ・リバティ]

ポリトコフスカヤは、最近チェチェン入りをして、ラムザン・カディエロフ支配下の収容所における拷問の実態について徹底的な取材を行い、ロシアに戻ってからは新聞やラジオなどで精力的に報道を続けていました。

BBC による二年前のインタビューの時、ポリトコフスカヤ女史は「脅迫を受けても、報道を続けなければならないと信じている」と語っている。「リスクは、私のような仕事の一部だと考えています。ロシアでジャーナリストという仕事をしているからです。この仕事をやめることはできません。私はこんな風に考えているんです。医者者の義務は患者を治療すること、歌手の義務は歌うことです。ジャーナリストにとってのそれは、現実の中で自分自身が見てきたことを、書くことなんです」

2006年11月10日記

